

台湾における年少者日本語学習者の第二言語習得

—台湾の二つの日本語教育施設における幼児の日本語による対話・応答に関する考察—

国立台湾大学 大学院生
外間 郁江

近年、台湾での日本語学習者の年少化は進み続けているが、年少者の日本語における第二言語習得に対しての研究はあまり多く行われてこなかった。台湾の幼稚園では、他との差別化から英語の学習に飽き足らず日本語や日本文化を異文化教育の一環として教え、バイリンガル以上の語学力を身につけさせようと、子供たちに日本語を学ばせたいと考える父兄も昨今多く見受けられる。しかし、現在幼稚園などの日本語を教える施設は英語教育を行う機関に比べると少なく、台湾での年少者の日本語学習に対しての研究は、大学生や高校生の研究に比べて決して多いとは言えない。それゆえ、実際に年少者がどのような環境で日本語を勉強し、彼らに対してどのような教育が行われているかということが詳細に見えてこないというのが現状である。そこで台湾における年少者日本語教育の実態の一端を確認し、その授業の間に使われる既習の日本語を機能面からその言葉の使用程度を調査した。

本論文では、二つの異なる施設において日本語の環境で教育を受ける台湾人を両親にもつ幼児たちの第二言語習得過程を調査し、また各施設へ直接赴きその学習環境を調査した。その上で、授業中に行われる発話を記録し分析したのである。全書を通して、二つの施設で日本語を学ぶ生徒たちの日本語学習に関する全般を把握し、その結果を考察していく。二つの施設との比較を試み、国外で日本語を外国語として同じようにバイリンガル教育のもと学ぶ幼児たちとの間にどのような違いが現れるかを分析した。幼児たちが学ぶ教育施設にはどのような環境の下で、既習の日本語を使い、どのように授業中コミュニケーションを取っているのだろうか、また母語のみで言葉を学ぶモノリンガルの幼児たちと言語の発達上、発話の機能に違いが現れるだろうかを考察したのである。

そこで今回、調査結果で最も多く確認された発話の中で、特に幼児による対話と応答を中心に論文をまとめた。目標言語を学ぶ過程において、発話機能の部分から見ると対話機能が多くなり、そして言葉を覚え、表現を覚えることで発話の機会は、他の発話機能へと教室で使われる言葉の数に変化していく。台湾における二つの日本語教育施設における台湾人年少者日本語学習者らの第二言語習得状況及びプロセスを考察することを目的とする。

キーワード：第二言語習得、年少者日本語学習者、バイリンガル教育